

東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査

明石田遺跡 概報
背坂遺跡

福島県文化財調査報告書第22集の8

昭和45年3月

日本道路公団
福島県教育委員会

序

本県は、原始時代の遺跡はもち論、関東との接点に位置するところから、古代の遺跡が特に多く、われわれの祖先の生活文化を、如実に物語っています。

東北縦貫自動車道の建設が計画されるや、これら文化財の適正保存をはかるべく、昭和41年より分布調査を実施いたしました。これにより、極めて重要なものについては保存をはかり、記録保存すべきものについては更に予備調査を実施して資料を整え、最終的に50余カ所の遺跡を発掘調査することになりました。

本事業は、3年計画のもとに進め、本年度はその初年度にあたり、13の遺跡について8次にわたる発掘調査を実施し、予定通り終了をみてその調査概報を発行するはこびとなりました。もとより概報でありますので、不じゅうぶんなものではありませんが、学術資料としてご活用いただければ幸いです。

本調査に際し、ご多忙の中、発掘にあたられた調査員各位、郷土の文化財保存の熱意からご援助下さった協力者の方々、並びに調査の運営に、全面のご協力を惜しまなかつた市町村教育委員会をはじめ、関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭和45年3月

福島県教育委員会教育長

三本杉 國 雄

目 次

I 調査経過	1
(1) はじめに	1
(2) 調査経過	1
II 概 要	2
1 遺跡の位置と現況	2
(1) 背坂遺跡	2
(2) 明石田遺跡	3
2 遺 跡	4
(1) 背坂遺跡	4
(2) 明石田遺跡	5
3 遺 物	5
(1) 背坂遺跡出土遺物	5

凡 例

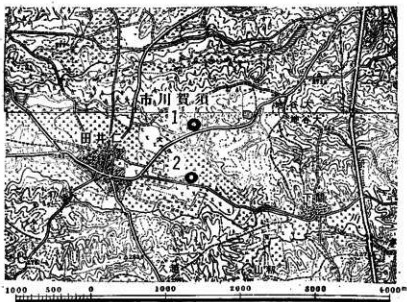
- 1、この発掘調査は、日本道路公団と委託契約を結び県教育委員会が発掘調査を実施したものである。
- 2、概報なので、原則として実測図は付さず、出土品も未整理のものは省略した。
- 3、全体計画終了後、報告書として一括して刊行する予定である。
- 4、執筆は、担当者・調査員・参加者などが分担したのものもある。図面・写真も同様である。
- 5、出土品は、県及び関係市町村教育委員会で保管している。
- 6、編集は、事務局職員が担当した。

1. 所在地 背板遺跡 須賀川市仁井田字背板
明石田遺跡 須賀川市仁井田字明石田
2. 調査期間 昭和44年12月5日～12月11日
3. 調査主体者 日本道路公団・福島県教育委員会
4. 調査組織 担当者 渡辺 一雄
調査員 菅原文也・鈴木重美・小針 繁
5. 協力機関 須賀川市教育委員会

1 調査経過

(1) はじめに

二つの遺跡は距離的にも近く、同一組織で同時期に調査した。また明石田遺跡の方は何らの遺構・遺物の発見がなかったので、ここでは両遺跡の報告をまとめて行なうこととした。本遺跡周辺には、他にいくつかの遺跡の所在が知られているが、開田事業などで発見されたものが多く、遺物も残っていないので、時期や遺跡の性格などは不明である。



第1図 1. 背板遺跡 2. 明石田遺跡

(2) 調査経過

12月5日(金)晴れ

朝の急行いわきで、渡辺・菅原・小針の3人は須賀川へ。市教委で社教課長へ挨拶し、直ちに現場に近い仁井田中へ行く。そこで県教委の加藤忠司・市教委の永山倉造らと調査員とで、調査の打合せをする。

昼食後背板遺跡へ。昨日の降雪で、真白な雪で表探もできない。

— 幅杭がわかるので、西側一ばいにトレンチを設定する。予想よりも地山まで浅い。

Aトレンチ・Bトレンチを掘り上げ、Cトレンチ半ばで終る。これも遺構なく、表土層より小破

片の土師器が数片のみである。

12月6日（土）晴れ

8時半作業開始。ベルコン二台を入れて排土作業。C～Fまでのトレンチを掘り上げる。Dトレンチに黒い落ちこみがあるが、住居跡にしては小さすぎる。かって林であった時の根を抜いた時のものであろう。4時すぎ作業終る。

12月7日（日）くもり

今にも降りそうな天気である。仕事はかどらず、昨日のDトレンチの落ち込みを掘り上げ、Gトレンチを掘る。いぜんとして遺物や遺構の発見はない。

雪もとけて、表探すると、道路予定地外の方が土師器の破片は多いようである。

12月8日（月）晴れ

大変に暖かい好天候である。ベルコンを使っているので排土作業進む。

巾ぐいに沿って並行に、Hトレンチ、Iトレンチを入れる。Iトレンチの端の方、すなわち台地の高い方は、地山まで浅い。開盤した時にけずられたようである。

新安積礫水の南側の崖面の所に、住居跡断面が見える。柱穴がはっきりしていて、そこから土器片が出る。

12月9日（火）晴れ

遺跡の中心地から離れているので、予定の16日まで実施せず、早目に切り上げることを話し合う。

明石田遺跡の方も、どうも遺物は少ないようであるが、きょうから菅原・小針両調査員と県教委の鈴木・村川両氏の応援を得て、ビットを掘って様子を見ることとする。十ヶ所以上にビットを掘ったが、何れも何の発見もなかった。

12月10日（水）晴れ

人夫を使っでの作業もきのうまでとし、きょうは、トレンチ全体の平面と断面の実測を午前中行ない、午後住居跡断面の断面図をとる。

12月11日（木）晴れ

午前中に出土遺物の整理をし、午後発掘用具の整理をし、地元や市教委へ挨拶をして、今回の調査は全て終了した。

（渡辺一雄）

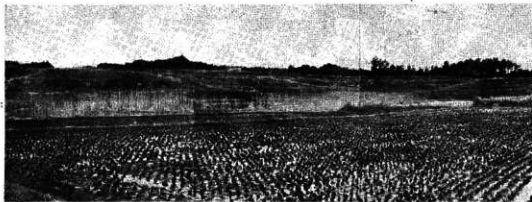
Ⅱ 概 要

1 遺跡の位置と現況

(1) 背坂遺跡（第2図）

遺跡は、須賀川市の北西約6kmにある仁井田より、さらに北東へ1km入った台地上にある。

当遺跡の規模は4,000㎡であるが、今回の調査対象地は、東北縦貫自動車道にかかる台地の北東端である。



第2図 背板遺跡遠景

遠く東側に南北に東北本線・国道4号線が走り、南には滑川、北には安積礫水、さらには笹原川が流れている。近くには大谷地に至る県道が東北に伸び、南に仁井田川がある。

仁井田部落は郡山盆地の南西の一角にあり、標高262mである。遺跡のある台地は、標高275m～272mの高さがあり、遠方には東に阿武隈山地、西には会津の山脈、南に那須岳（海拔1,917m）、北に安達太良山（海拔1,700m）の雄姿が望見される。台地は南に台形に張り出しており、台地縁を新安積礫水の分水路が流れている。この水路脇の台地断面には、数多くの住居跡が露出しており、集落の存在が予想されるが、今回の発掘調査地点は北東部であり、多くは望めなかった。

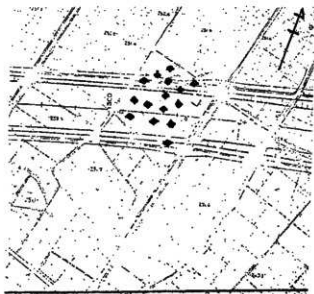
遺跡一帯には、土師器や須恵器の破片が散布しており、日当たりの多い南側台地に濃厚な分布が見られる。

発掘地点は、開墾された畑地であるが、表土は割合浅く、ローム層の地山まで深い所で70cm、浅い所で20cm程である。

(2) 明石田遺跡（第3図）

明石田遺跡は、県地名表記遺跡1,608の明石田遺跡とは別個の遺跡で、背板遺跡から南700m程の、仁井田部落から滑川に至る市道の北側にあり、背板遺跡が眺望できる。

当遺跡は、四方を水田に囲まれた平地であるが、わずかに高く、標高251mの桃畑跡が中心である。遺跡の規模は900㎡で、うち400㎡が東北縦貫自動車道に入る。かつて、石鏝や土器の出土があったようであるが、現在は土器片の分布なども見られない。（小針繁）



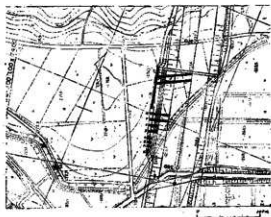
第3図 明石田遺跡図

2 遺 跡

(1) 背 坂 遺 跡

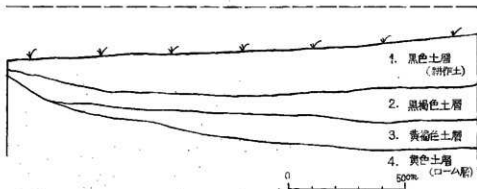
背坂遺跡は、須賀川市仁井田字背坂地内の洪積世台地にあり、遺跡は畑地になっている。今回調査した地点は、台地の東側でゆるやかな斜面になっているところである。

調査は、2 mのトレンチに3 mの間隔をおき南からA～Gの東西平行トレンチを7本入れ、さらに道路橋ダイに沿って南北にHトレンチ、Iトレンチに接して東西にI・Jの平行トレンチ(2×50 m)を入れ、調査予定地南端に三角形の変形トレンチを設け発掘した。全トレンチを30～70cm掘りローム面まで調査した。しかし、結果は黒色土層(耕作土)黒褐色土層中より数片の土師器・須恵器の破片が認められただけで、他に遺物は発見できなかった。Kトレンチからは十数片の土師器・須恵器が検出されたが、住居跡等は発見できず、しかし、背坂遺跡の発掘地点より南西160 mの新安積疎水建設の蒸餾り取られた、南面の台地縁に数個の住居跡の断面が露出しており、集落跡の存在が予想される。



背坂遺跡、トレンチ設定図

1号跡(第6図)は南側が削り取られ、その形態も明瞭ではないが、西側壁寄りに15cm～20cmの柱穴の痕跡が2個、東側壁寄りに1個確認できる。いずれもかなり深く、その中から土師器小破片数片が発見された。2号跡(第7図)は1号跡と同じように削り取られているが、ローム層面への掘り込みがはっきりしており、東壁で35cm、西壁で20cmを測る。東西に2.8m。柱穴などの痕跡なし。底面は全体に平坦であるが東側壁寄りに15cmほど落ち込んでいる。他に数個の住居跡の断面が実見できるが、削り取られ、その形態を明瞭に確認することはむずかしい。



第5図 背坂遺跡 Aトレンチ西壁断面図



第6図 背板遺跡 台地南側にみられる住居の柱穴



第7図 背板遺跡 2号住居跡断面図

(2) 明石田遺跡

遺跡の中心と思われる桃畑に、 2×2 mのビット15個所入れる。ロームまでの深さ、40~60 cm。遺構、遺物の検出に努めたが検出されず、時間的制約もあり、これ以上の調査を進展させなかった。
(鈴木重美・菅原文也)

3 遺物

(1) 背板遺跡出土遺跡

本遺跡からの発掘調査による出土遺物は稀少で、わずかにKトレンチにおいて土師器片・須恵器状の出土をみただけである。他に調査地域から離れた1号住居跡柱穴ビットから、土師器片数片の出土があったのをつけ加えてもわずかである。いずれも小破片で土師器が大半を占めている。

A. 須恵器

器壁の厚い、焼成の堅い破片が多い。色調は淡青灰色を示している。表面に籬目様の叩目文が施文されているもの、また、自然釉が浸出しているものも含まれている。

B. 土師器

イ. Kトレンチ出土土師器

いずれも破片で、その形態を知ることはできないが、破片中の口辺部ならびに底部を資料に推考すると、杯形土器と甕形土器の二形態を考慮することができる。

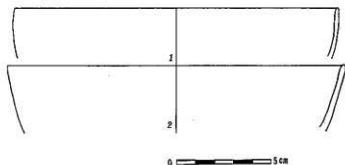
杯形土器(第8図1.2)は胎土、焼成良好で、土師器特有の茶褐色を示している。口唇

部はそれほど発達しておらず、器厚約3mm口径は17~18cm、内面はいずれも黒色である。壺形土器（第9図1.3）は坏形に比し、数少なく、器形全体を窺えるものはない。1は頸部のくびれがやや強く、口辺部はくの字状に外反する。胴部はそれほど強く張っていない。口縁内面にわずかに稜を有する。色調は黄褐色、胎土に微石が混入されている。3は口辺部が外反して開き、口縁部は外面が平坦になっている。赤褐色で器表面に密集した微細な横位の線痕が認められる。他に口縁部の（第9図、4）のみで、体部以下ははっきりしないが、壺形土器と思われるものがある。接がれた口縁部は外反し、外側に稜線を有すると思われる。色調は黄褐色胎土、焼成ともに良く、丁寧につくられている。

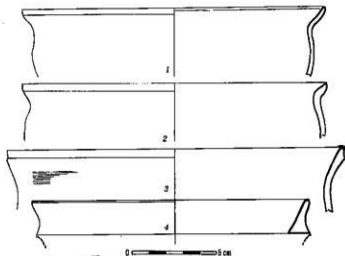
底面（第10図）はいずれも平底であるが、糸切痕をもつものと、篋工具によって糸切痕が消去されたものがある。2.3.4.6が糸切痕の明瞭に確認できるもので、他の1.5.7.9は篋によってみごとに削平されたものである。いずれも内面は黒色であり、胎土、焼成も良好である。ただ8は篋痕が残っているが、胎土に微石が混入しており、器面内側に整形のための擦痕が顕著で、また、赤彩が施されている。

ロ、1号住居跡出土・土師器（第9図、2）

口辺部のみであるが、住居跡西側壁寄りの柱穴跡より出土、器形は壺形土器と思われ、色



第8図 背版遺跡 Kトレンチ出土・土師器

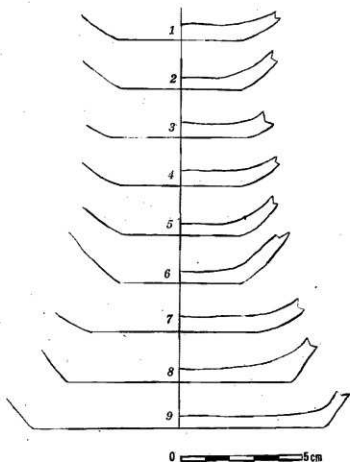


第9図 背版遺跡 Kトレンチ出土・土師器

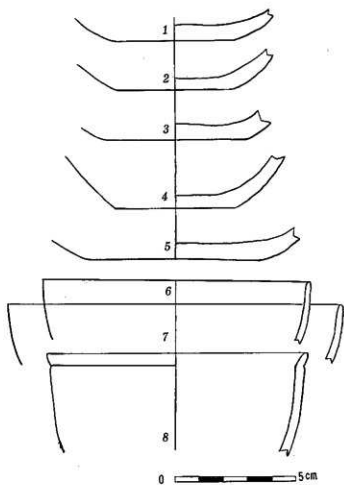
調は橙色。口縁部はくの字形に外反し、その内側にわずかながら稜を形成している。胎土・
微石が混入し、焼成も悪い。

ハ、表面採集による土師器（第11回、1～8）

いずれも破片であるが、杯形土器と思われる。全て内黒で、色調も薄い褐色ないし橙色
ある。胎土・焼成ともに良い。 （吉原文也）



第10回 穿鉢遺跡 Kトレンチ出土・土師器



第11圖 背板遺跡 表面採集土節器

昭和45年3月15日印刷
昭和45年3月31日発行

福島県教育庁社会教育課
福島市杉妻町2-16

印刷 小浜印刷株式会社
福島市陣場町9-3